「ＧＡＰ取得チャレンジシステム」への挑戦を支援

■管内の酪農家　Ａ牧場　■

（東讃農業改良普及センター　二宮　浩）

●対象の概要

東讃管内では、45戸の酪農家が約3,000頭の乳牛を飼育しているが、ここ数年経営者の高齢化や素牛価格の高騰、経営の悪化から飼養戸数が減少している状況である。

こうした中、乳牛メーカーからは、高品質な生乳の安定供給が求められており、酪農部会では年に２回戸別巡回を実施して生乳生産管理チェックシートの確認を行いより安全・安心な生乳生産に取組んでいる。

Ａ牧場（酪農）は、搾乳牛120頭を飼育する管内でも主要な酪農家であるが、より一層の経営基盤の強化を図るため搾乳牛300頭体制を目指して、平成28年度から牛舎や搾乳施設等の整備を行っている。

●課題を取り上げた理由

Ａ牧場では、規模拡大に伴い新たな施設を整備し、従業員も雇用することになっていることから、新たな施設や人材で安全・安心で、かつ、高品質な生乳生産に取り組む必要が出てきた。こうした中、平成30年度に取り組んだ補助事業の採択基準に「ＧＡＰ取得チャレンジシステム（以下チャレンジ）」への取組があった。チャレンジは、①飼養衛生管理基準、②生産衛生管理、③アニマルウェルフェアに対応した飼養管理、④環境と調和のとれた農業生産活動規範を、畜産農家自身が自己点検を行い、その結果を（公）中央畜産会のホームページ(以下ＨＰ)に入力して、基準を満たした農場を確認済農場としてＨＰで公表する制度である。

チャレンジは、経営発展と安全な畜産物の提供、対外的な信用の確保にも有効であることから、取組を開始することとしたが、県内で認証された農家は無く、何から始めればよいのか、分からない状況であった。このため、普及センターでは、関係機関と協力してチャレンジの取組を支援することにした。

●普及活動の経過

１　指導体制づくり

「畜産ＧＡＰ拡大推進加速化事業」を活用して、畜産課や農業経営課、家畜保健衛生所、香川県農業協同組合（酪農振興センター、東讃畜産振興センター）、畜産協会が連携してＡ農家等を指導するため指導チームを構築した。

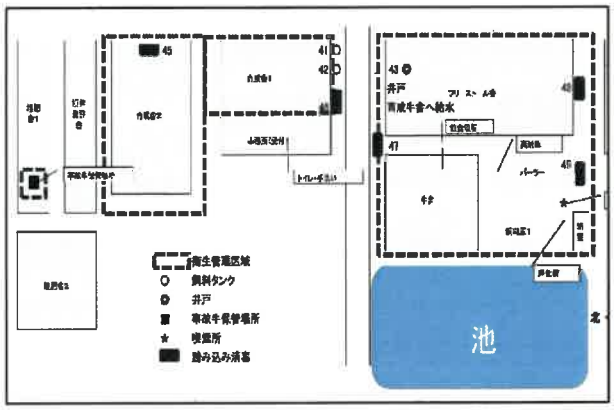
２　ＧＡＰの普及啓発

まず、従業員が、ＧＡＰの内容を理解することが必要であることから、説明会を開催した。ＧＡＰは農家ごとに異なるため、具体的な内容を、継続的に学習、検討、実践することが必要と考え、指導チームでは毎月１回定期的に、検討会を行った。

従業員にＧＡＰについて説明

３　衛生管理区域の設定

牧場の飼養衛生管理基準チェックシートを点検した結果、衛生管理区域の設定や区画の明示が不十分であると分かったことから、衛生管理区域を設定した。



衛生管理区域の設定

牧場
GAP 取得チャレンジシステム手順書
JGAP【家畜・畜産物】
2019 年版

作成者：
承認者：
作成日：２０１８年　６月１５日
改定日：２０１８年　９月　６日
改定日：２０１９年　３月２０日

作成した手順書

４　作業マニュアルの作成

次に、作業のマニュアル化に取り組むこととし、最初に一番重要と思われる「搾乳マニュアル」のの作成から着手した。安全でおいしい牛乳を生産するためには、操作ミスや見落としのない搾乳作業を、毎回・毎日継続することが必要である。搾乳施設には、多くのスイッチやバルブがあり、大型経営の場合、複数の従業員が操作するため、伝言や伝達だけでは、忘れや勘違いによる、操作ミスが発生する可能性がある。そこで、作業マニュアルを作成し、勘違いなどによる誤操作の発生を防止することにした。

作業マニュアルを作成した搾乳作業

５　適合基準への対応と手順書の作成

記録や帳票類は、一般財団法人日本ＧＡＰ協会が定める「農場用管理点と適合基準」に適合しているかを指導チームで点検した。その結果、７割程度は適合できていたが、残る３割は基準に適合するよう対策が必要であった。そこで、新たに必要となる帳票類を、ＧＡＰ協会のＨＰ等から引用提供して、基準に適合できる「ＧＡＰ取得チャレンジシステム手順書」の作成を支援した。

●普及活動の成果

１　ＧＡＰの普及啓発

毎月１回検討会を開催することで、従業員のＧＡＰに対する普及啓蒙が図れ、意識の向上がみられた。

２　衛生管理区域の設定

衛生管理区域を設定したことで、関係者以外の立ち入りを制限でき、防疫対策が向上した。

３　作業マニュアルの作成

作業マニュアルを作成したことで、各従業の手順が明確になり、効率的な実施とミスの防止に大いに役立った。

Ａ牧場では、「ＧＡＰ取得チャレンジシステム手順書」を、2019年３月に社員に説明し、チャレンジに取組む計画である。2018年６月に提出した際には確認農場として認証されなかったが、2019年４月に、再度点検後、再応募する予定である。

●今後の普及活動の課題

Ａ牧場以外にも２戸の畜産農家がチャレンジの取組を進めており、チャレンジに合格すれば、畜産ＧＡＰ認証取得の準備ができた段階となり、その後は日本標準である畜産Ｊ－ＧＡＰの認証取得へ向け、取組が発展的に進むよう、取り組む経営体を支援していく予定である。

2018年４月から、本格的な畜産ＧＡＰの認証が始まり、全国で63農場（2019年３月現在）が認証されているが、県内で認証された畜産農家は無く、何から取り組んでいいのか分からない状態であった。ＧＡＰの取組みは、経営発展と対外的な信用獲得につながるため、大型経営には必須になることから、まず、取組を希望する農家と、「Ｊ-ＧＡＰ家畜・畜産物の農場用管理点と適合基準」を満たす道筋を、ともに考えることが第１歩となる。